

中国における「日本陽明学」の受容 —張君勳と朱謙之の場合—

鄧 紅

要約

「日本陽明学」は、十九世紀末期から二十世紀初頭にかけて、何人かの日本人が400年前の中国明代の思想家王守仁（号「陽明」、1472-1529）の号を盗用し命名した社会運動である。その時期に日本にやってきた中国人の有名人たちは、「日本陽明学」を発見し、弁別せずに受容したうえ中国に持ち帰った。張君勳と朱謙之という二人の学者に焦点を合わせ、二人がどのような「日本陽明学」を受容し、如何に中国に伝えたかについて考察する。

キーワード

「日本陽明学」、社会運動、学術研究、張君勳、朱謙之

序論—「日本陽明学」という視角

筆者は近年、「日本陽明学」という概念を提起し、いくつかの論考を公表してきた。¹それらによれば、「日本陽明学」は、下記のような幾つの特徴を持つ。

1、「日本陽明学」とは、十九世紀末期から二十世紀初頭にかけて、三宅雪嶺、徳富蘇峰、高瀬武次郎、井上哲次郎など何人かの日本人、あるいは『陽明学』という雑誌は、400年前の中国明代の思想家王守仁（号「陽明」）の号を盗用して、自分たちが起こした社会運動に命名したものである。その社会運動は、対内的に、「精神界の改革を謀り、社会の良心の麻痺を救い、国民の品性の墜落を救う」運動であり、対外的に、「国体を護持し国威を海外に発揚する」という東洋の新しい国際社会ないし世界に向けて、日本の東アジアの覇権を宣伝するキャンペーンであった。²

2、日本陽明学の原型、例えば江戸時代からの日本陽明学派の系譜、王陽明思想を「心即理」、「知行合一」、「致良知」と三点セットに簡略した通俗的理解、陽明学は明治維新の原動力という神話な

¹ 以下の中国語の拙文を参照されたい。1)『井上哲次郎の江戸儒学三分法批判——以“日本阳明学派”为中心』、『国际儒学论坛2009・儒家安身立命之道』,北京:中国人民大学出版社2009年。2)『孙中山和日本阳明学』,2011年「日本留学生和辛亥革命」(武汉大学・法政大学共催)学術討論会での発表論文。3)『从朱子学到阳明学——论岛田虔次阳明学研究心路和解释方法』,余治平、周明俊主编:『中西哲学论衡(第三辑)』,上海:中西书局,2014年。4)『何谓“日本阳明学”』,上海:『华东师范大学学报』,2015年第四期。

² 一九八三年(昭和五十八年)岡田武彦監修、木耳社版『復刻・陽明学』第一卷、『総論』。

どは、三宅雪嶺の『王陽明』（政教社一八八三年初版）という書物が提示し、高瀬武次郎の『日本之陽明学』（鉄華書院一八九八年初版）がその骨組を立てて、井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』（富山房一九九〇年初版）が肉付けたものである。一方、一八九六年（明治二九年）七月五日に創刊した『陽明学』という名の大衆雑誌は、日本陽明学の社会的障地を構えた。

3、「日本陽明学」には、「学」という字がついているが、決して学術研究、学術流派でもなければ、思想流派でもなく、王陽明の哲学思想が異国の日本で進化、再生、「近代化」されたものでもない。ただ王陽明哲学思想の「心即理」、「知行合一」、「致良知」などの項目を、簡単化、通俗化したうえ、政治的、日本主義的な解釈を施し、対内的に「国民的道德」の建設、対外的に「国体を護持し国威を海外に発揚する」日本主義精神の源を求めたものである。

4、「日本陽明学」の発動者たちは、学術研究でない社会運動に「陽明学」という一見学術風のような名称を付けただけでなく、「日本陽明学」の権威性、学術性と普遍性を高めるために、いくつかの虚構まで作り上げてしまった。いままで、それらの虚構について、日中両国の学者はただ傍観する態度をとっており、正面を切って反論したことが一度もなかった。加担するものさえいた。

虚構一：「陽明学が明治維新を先導した」あるいは「陽明学は明治維新の原動力」だ。

筆者の論考によれば、これは論証されていない説で、「日本陽明学」の価値を高めるための作り話だ、ということである。中国建国の父孫文は、百年前にもこの「陽明学の明治維新原動力論」を見破って、批判したことがある。³日本の島田虔次氏も、幕末に陽明学が流行りはじめて、やがて陽明学を使って維新の成果を解釈する風潮が現れた、と述べたことがある。⁴

虚構二：江戸時代から日本では「日本陽明学派の系譜」が存在した。

筆者の論考によれば、古から日本では「日本陽明学派」が存在したことない。「日本陽明学派」は、「日本陽明学」の発動者が日本江戸時代の漢学者を分類するために人為的に作った枠「Category」に過ぎない。日本の学者も、「また学派の流れというものを見いだすこともほとんどできない。学派の名があるとしても、それは後代の人が便宜的に仕分けして名づけたもので、当時そういう学派が存在していたわけではない、というのがほとんどである。」⁵と暴露する人がいた。

虚構三：中国の陽明学派は、陽明学の悪い部分である「枯禪」という仏教的空論を継承したので、遂に中国を亡国（明朝滅亡あるいは日清戦争失敗）の道を導いた。日本の陽明学は、「事業的元素」（高瀬）「事功」（井上）を重視するので、明治維新のような偉業を達成した。

³ 前掲拙論『孙中山和日本阳明学』をご参照。

⁴ 狭間直樹主編『梁启超・明治日本・西方』中国語版。社会科学文献出版社2001年版。狭間直樹著『「新民説」略論』第81ページの注③を参照。

⁵ 溝口氏注釈『伝習録』の解題『二つの陽明学』、中公古典クラシックス一、二、中央公論新社二〇〇五年版。第一三頁。

筆者の論考によれば、中国の陽明学はそんなに悪いものではない。日本では、王陽明、泰州学派および李卓吾の思想は「中国近代思惟の萌芽」と考える学者もいた。⁶

そのほかに、「陽明学は、カントをはじめ、西洋のいかなる思想と比べても劣らない」、「陽明学＝反体制派、朱子学＝体制派、両者は厳しく対立している」などの虚構もあった。

ところが「日本陽明学」が発動されブームまで発展した十九世紀末期から二十世紀初期は、中国の留学生ないし革命者たちが大挙日本にやってくる時期と重なっていた。

その時期に日本にやってきた中国の著名人たち、梁啓超、宋教仁、章太炎、蒋介石ないし孫文などは、当時の中国ではあまり評価が高くなかった明代王守仁の心学が、日本で「心即理」の精神第一主義、「知行合一」の行動主義および「致良知」の実践主義を重視する「日本陽明学」に変貌して、熱烈な社会運動になって、日本の近代化をもたらした明治維新の原動力であると言われたことを発見し、みんな一種の新奇な心情と無名の誇りを感じていた。それで彼らは「日本陽明学」を無弁別的に受容したうえ、中国に持ち帰った。

筆者は、これまで孫文、梁啓超と「日本陽明学」⁷をテーマに考察してきたが、小論では、張君勳と朱謙之に焦点を合わせ、彼らがどのように「日本陽明学」を受容し、中国に伝えたかについて、考察していきたい。

二、張君勳の「日本陽明学」踏襲

1、張君勳という人

張君勳（一八八七—一九六九）、本名は嘉森、字は士林、号は立齋、江蘇省宝山（今上海市宝山区）の人。六歳の時私塾に入り、一二歳の時上海江南製造局広方言館に入る。二〇才に日本留学、早稲田大学で法律と政治学を学び、後ドイツに留学して哲学を学ぶ。

張君勳の生涯は政治と学術の間に徘徊していた。政治の方面では、一九三〇年代から中国国家社会党などを作り、一九四〇年代後半では蒋介石の中華民国憲法に携わったことがある。一九四九年、中国共産党に反対したため、内戦の戦犯の一人と中国共産党から宣告されたことがある。

一九五〇年代、張君勳はアメリカに移住し、学問に復帰した。自分の専門の政治法律から逸れて、中華文化の復興を鼓吹し、新儒家提唱の先頭に立ったのである。⁸

その前に彼は『比較中日陽明学』（一九五五年）を著し、戦後逸早く本家の中国で（台湾だが）

6 『中国における近代思惟の挫折』（筑摩書房、1949年、改訂版1970年）。

7 『孙中山和日本陽明学』、2011年「日本留学生と辛亥革命」（武漢大学・法政大学共催）学術討論会での発表論文。『梁啓超和“日本陽明学”』、2015年嶺南心学研究会での発表論文。

8 張君勳は一九五七年に『新儒家思想史』を出版し、新儒家の最初の著作と言われたものである。一九五八年、彼は唐君毅、牟宗三等と連名で「中国文化与世界」、所謂「新儒家宣言」を出し、儒学が「五四運動」以来、現代中国思想の舞台に再登場することを宣告したものである。

陽明学の顕彰に勤めた。

『比較中日陽明学』は、張君勳が一九五五年アメリカのワシントンに在住時の著作である。儒教復興と東西文化の貫通のために書かれたとみられる。その目次は、下記の如くである。(括弧内は筆者の翻訳)

引言 (初めに)

卷の上

篇一 陽明学説体系

篇二 王学衰落

篇三 考証学或経学能取理学或哲学之地位而代之乎

(考証学或いは経学は理学或いは哲学の地位を取替えることができるか?)

卷下

篇四 日本陽明学之興起

篇五 日本陽明学的復興及其贊助日本開国与維新大業

(日本陽明学の復興および日本の開国と維新大業を贊助する)

篇六 日本陽明学之特色与中日王学之合作

校後記 (牟宗三)

2、『比較中日陽明学』の目的

『比較中日陽明学』著作の目的について、彼は「引言」に次のように言う。

日本王学者の実行の面における義勇と活発は、わが国の人が及ばないところがあるから、日本の長所をとって、我が国の短所を補うべきである。

書末に次のように述べる。

日本はかつて王学で開国維新の大業を達成した。同じ学説だが、結果は大きく異なることは、明末の失敗は、王学を解釈する者の責任であり、王学自身の結果ではないことは明らかである。私はさらに近代欧米の哲学を考え、王学と比較し、互に通ずることがあれば、吾信仰が一層に強くなるのだろう。もし通じるところがなく、修正あるいは補充すべきところがあって、以て現代の需要に満たすことができれば、我が国の人々が当に努力すべきところではないか?

私がさらに言いたいのは、日本王学者の心の純朴さ、空言して行動しないことを極めて避けるこ

とが、我が国の人々の学ぶべきところである。

(篇六)⁹

日本の陽明学は、実践の方面ではすぐれた所があり、中国人はそれを学ばなければならならず、それを学んで現代の中国社会に応用して行動を起こすべきだ、という。『校後記』の牟宗三の言葉でいえば、「王学を振興し、日本に鑑み、王学のように活発的な事業を起こすことによって恢復させる」、ということである。

考えてみれば、一九五五年の日本は、いまだ敗戦の深淵から再起していなければ、「日本陽明学」も戦前の盛大な社会運動から下火になり、往時の栄光になかなか戻れない状態にあった。その凋落ぶりについて、一九七〇年作家の三島由紀夫は次のように述べたことがある。

行動哲学としての陽明学はいまや埃の中に埋もれ、棚の奥に置き去られた本になった。別な形で、朱子学が復興しているなどといわれながら、朱子学の一分派ともいわれる陽明学は、ごく一部の愛好者を除いて、その名のみが知られているのが現状である。アメリカでは陽明学を研究している三人の学者がいるそうだが、日本では陽明学の家といわれる二、三の学者の家に伝承されるばかりで、政治家や、現実的な行動家のよって立つべき基本的な哲学としてのメリットは、おおよそ失われたとってよい。¹⁰

それにもかかわらず、上記の張君勳たちの言葉（牟宗三の「校後記」を含む）は、一九五〇年代「日本陽明学」の凋落状況を顧みず、依然として「日本陽明学」の偉大さをうらやましく語っていた。彼らが憧れているのは、あの明治中葉から大正期までの「日本陽明学」という社会運動のかつての盛況と虚栄であり、あのような社会運動を一九五〇年代の中国で再現したい、させたい、それこそ『比較中日陽明学』を著した目的だ、と思われる。

3、本家の陽明学説体系の特徴

『比較中日陽明学』の「巻上」は、主に王陽明の本来の説と発展衰落を述べる。

第一篇の「陽明学説体系」では、王陽明の学説を六方面にわけて詳しく論述し。

⁹ 『比較中日陽明学』中華文化出版事業委員会 一九五五版、第九三頁。

¹⁰ 「革命哲学としての陽明学」、『諸君』一九七〇年九月、二三—四五頁。新潮社『三島由紀夫全集』一一評論、第二七七頁。

- (甲) 理と気
- (乙) 心と理
- (丙) 身、心、知、意、物
- (丁) 知と行
- (戊) 致良知
- (己) 万物一体為立己立人之準則

張君勳の解説によれば、

甲乙丙は、まとめて言えば、理気合一、心理合一、身、心、知、意、物は一件（一体）であり、「心即理」である。

丁は、知と行の関係で、知行合一であり、陽明学の中の最も重要な説である。

戊は、致良知は陽明成熟期の言葉、宇宙論を本源とするものである。

己は、致良知の拡充で、「経国経民」、つまり、国をおさめ、民をたすけることである。

結局は、王学の精華を「心即理」、「知行合一」、「致良知」の三項目にまとめただけである。

4、「日本陽明学」の概況について

『比較中日陽明学』の「巻下」は、主に「日本陽明学」論を展開した。

「篇四」の「甲」は主に中江藤樹まで、いわゆる「日本陽明学」誕生までの儒教の日本伝来と発展史を述べた。

「乙」は「日本陽明学之興起」である。その部分は、完全に井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』を踏襲している。

まず、日本では朱子学と陽明学は同時に並行している学問だが、朱学の流れは久遠で、後が絶えない。それに比べて、陽明学は時々断続していた。その理由について、張君勳は井上の「朱子学は官府の教育主義」、「陽明学は謀叛の学」¹¹という言葉そのまま引用して論証を行った。¹²

次に、張君勳は井上が述べた朱子学と陽明学の異同のあの著名な五項目を取り上げて、そのまま両派の特徴を説明した。

井上哲次郎は更に両派の異同を論じた。

甲、一方は（朱子学）徳性を尊ぶ。もう一方は（陽明学、以下は同じ）道学問。

¹¹ 『日本陽明学派之哲学』「叙論」。

¹² 『比較中日陽明学』第五九頁。

乙、一方は理気二元論。もう一方は一元論、あるいは理気合一。

丙、朱子は心に理気両面があると主張する。陽明は、心が明らかであれば理が自ら明らかになり、故に「心即理」を主張する。

丁、朱子は理を明らかにするために、博聞広見しなければならない、と主張する。陽明は真知は吾心に存在するから、外に求めないと主張する。

戊、朱子は先知後行を主張する。陽明はそれに反して、知行合一を主張する。¹³

そして、やはり井上の話を引用して、両派の短所と長所を説明した。

井上哲次郎は両派にはそれぞれ長短があり、その得失を定め易くない、と考えている。朱派には博学多聞の士が多いが、固陋迂腐を固守することを免れなかった。王学は主観に偏る弊があるが、学者は単刀直入、正鵠を得る方では、朱子学より優る。¹⁴

その次に、中江藤樹を日本陽明学の「提唱第一人者」として取り上げ、その事跡、文章と思想を論述した。その論述はほとんど井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』の内容を剽窃して、中国語に訳したものばかりである。

具体的には、『比較中日陽明学』第六〇、六一、六二頁にある中江藤樹の事跡と文章に関する紹介は、『日本陽明学派之哲学』の「第一編、中江藤樹及び藤樹学派」の「第一章、中江藤樹」の「第一、事跡」の第七頁から一四頁の関連部分を切り取り、文章に編み込んだだけである。

『比較中日陽明学』第六二頁に、次の文章がある。

藤樹の宇宙観について、井上哲次郎は「一元的宇宙観」と名づけて、三つの言葉で説明した。一曰く「神人合一」、二曰く「物我一体」、三曰く「内外瑩徹」。

「一元的宇宙観」という言葉は、『日本陽明学派之哲学』の第四二頁にあり、「神人合一」と「物我一体」と「内外瑩徹」とは、第八一頁一八三頁にある。

5、張君勳の「日本陽明学」系譜

『比較中日陽明学』の「編五」は、「日本陽明学の復興および日本開国と維新大業を賛助する」と

¹³ 『比較中日陽明学』第六〇頁。

¹⁴ 同上。

いう題目である。

「第一節」では、まず、「日本陽明学」の概況を紹介した。大塩平八郎の『古本大学刮目』を陽明学の最優秀著作として取り上げた。門下に人材豊富として、佐藤一斎を取り上げた。「日本陽明学」の中興の祖として、三輪執斎を取り上げた。甲、乙、丙の三節に分けて、執斎、一斎および大塩中斎（平八郎）を論じた。そして、佐藤一斎の門下として、以下の系譜が描かれた。

佐久間象山 吉田松陰—高杉東行
池田草庵
吉村秋陽
奥村惺斎
竹村梅斎
大橋訥庵（朱子学）
栗栖天山—河井秋継—川田夔江
山田方谷
東沢瀉
伊東潜庵 大久保甲東 西郷隆盛
柳沢芝陵
沢村西坡
林聖宇（朱子学）
中村敬宇（朱子学）

この「日本陽明学」の系譜と序列は、ほとんど、三宅雪嶺が提示し、高瀬武次郎の『日本之陽明学』がその骨組を立てて、最後に井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』が肉付けた¹⁵日本陽明学系譜と同じである。念のため、三者が描いた「日本陽明学」の系譜を次のようにまとめた。

15 山下龍二著『陽明学の終焉』（研文社平成三年、第一章の二「王陽明研究の原型」を参照。

中国における「日本陽明学」の受容
 - 張君勳と朱謙之の場合

三宅雪嶺『王陽明』	高瀬武次郎『日本之陽明学』	井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』
中江藤樹	中江藤樹	中江藤樹および藤樹学派
熊沢蕃山	熊沢蕃山	淵 岡山
三輪執斎	北島雲山	熊沢蕃山
川田雄琴	三宅石庵	北島雪山
佐藤一斎	三輪執斎	三重松菴
大塩平八郎	川田雄琴	三宅石庵
春日潜庵	中根東里	三輪執斎
西郷隆盛	鎌田柳泓	川田雄琴
高杉晋作	梁川星巖	中根東里
	竹村海斎	林 子平
	大塩平八郎	佐藤一斎
	佐藤一斎	梁川星巖
	吉村秋陽	大塩平八郎および中斎学派
	山田方谷	宇津木静区
	奥宮慥斎	林 良斎
	池田草庵	吉村秋陽
	春日潜庵	山田方谷
	伊藤茂右衛門	横井小楠
	西郷隆盛	奥宮慥斎
	大久保	佐久間象山
	海江田諸士	春日潜庵
		池田草庵
		柳沢芝陵
		西郷隆盛
		吉田松陰
		東沢瀉
		真木保臣
		鍋島閑叟
		広瀬武夫

6、「日本陽明学」と明治維新との関連について

「第二節」では、「日本陽明学」の開国と維新に対する貢献について、次のように言う。

その時期に偉大な陽明学理論家はいないが、佐久間象山と吉田松陰が開国に対して、西郷隆盛と伊藤博文が遠略政策に対して、みな日本にとっては大功があるものである。その薫陶の効に、陽明学の致すところがある。

それに続いて、その四人を明治維新の第一の功勞者として、詳しく論証した。

佐久間象山に対する論証は、奇妙な論理が展開する。象山は朱子を敬服して、王学に数えられないが、象山の「西洋芸術、東洋道德」論が素晴らしい。その理論は東西文化を公平に判断したもので、日本思想界に功勞があった。このような詭弁は、井上哲次郎に由来すると見られる。

井上哲次郎は、『日本陽明学派之哲学』において佐久間象山を陽明学派に入れたが、提示された証拠は、『象山全集』ではなく、一部分の詩文に表れた思想傾向だけであった。『日本朱子学派之哲学』の「付録第三、佐久間象山の人格と学説」では、『象山全集』に基づいて、象山の朱子学を論証している。

井上の言い方によれば、象山は陽明学者ではない。「吉田松陰は象山の門人であるが、まア陽明学者としてもよいのである。松陰の門人の高杉東行は陽明学者であった。」¹⁶、といった程度の話である。

つまり、吉田松陰と高杉晋作は明治維新の第一級の功勞者で、明治維新と陽明学との関連付けでは、最大の証拠なので、陽明学にしておかなければならないのだ。そうであれば、松陰の先生である象山も、ある程度陽明学と関連付けておかないと、具合がわるい、というのが井上流の詭弁の論理である。

故に、次節の「乙、吉田松陰」で、張君勸は提示した「松陰は陽明学者だ」証拠は、「松陰の先生が佐久間象山である」だけである。このような循環証明は、「日本陽明学」の間では、陽明学と明治維新の関連付けにおいて、常に循環的に行われている。

「丙、西郷隆盛」では、西郷が陽明学者だ、ということに関する論証は、すべて徳富蘇峰の『西郷隆盛先生』という伝記の引用に始終していた。

「丁、伊藤博文」では、伊藤博文を陽明学者として取り上げたが、その論証は、伊藤の政治生涯

¹⁶ 『日本朱子学派之哲学』第八三八頁。「付録第三、佐久間象山の人格と学説」。なお、本書第一章に述べたように、高杉が陽明学者だ、と最初に言及したのが、雪嶺の『王陽明』「祖述と反抗」、提示された証拠は、晋作は伝習録の後に、「王学振興聖学新、古今雜説途沈湮、唯能信得良知学、即是羲皇以上人。」という詩を書いたことがあるのみである。

を述べるにとどまるだけである。それもしょうがないことである。さすが井上をはじめとする日本の学者は、伊藤は松下村塾の生徒だったという以外に、誰も「伊藤博文は陽明学者だ」、と言及することがないからである。

なお、伊藤が韓国義士安重根に刺殺されたことについて、張君勳は「吉田松陰氏の『死而後已』四字の遺訓を實踐した」と述べたが、中国の学者としては、理解し難いものである。

7、「日本陽明学」の特徴

『比較中日陽明学』「篇四、日本陽明学之興起」（第六〇頁）では、日本人の性格と陽明学の関係について、次のように述べる。

- 第一、陽明學簡易直截，因而合於日人快刀快刃之性格。
- 第二、陽明學側重於「即知即行」，合於日人勇往直前之習慣。
- 第三、日本人注重事功，將陽明學應用於人間社會，發生大效果。

この部分も実は、井上が『日本陽明学派之哲学』の『結論』部分で述べた陽明学の日本化、あるいは陽明学の日本的性質に関する持論から抽出して、中国語の文章に書き換えたのに過ぎないと見られる。

「第一、陽明學簡易直截，因而合於日人快刀快刃之性格。」は、井上の次の言葉に当たる。

然るに学として陽明学より単純なるはなし。易簡直截といふものの洵に当たり。これを以て日本人の陽明学に接するや、其性其物と適合し、此れを以て彼れを迎へ、彼れを以て此れに容れ、相互融会して一となり。・・・・・・・・

（『日本陽明学派之哲学』P 五七四頁。『結論』）

「第二、陽明學側重於「即知即行」，合於日人勇往直前之習慣。」は、井上の次の言葉に当たる。

其実行に資すべき者の多きは、斷乎として疑ふべからず。陽明学派の人、論著甚だ少なきも、彼等の行状は著書に代わるべきもの。・・・・・・・・知行一致が彼等の主義なるが如く、彼等は其知る所を實行せり。

（『日本陽明学派之哲学』P 五七五頁。『結論』）

「第三、日本人注重事功，將陽明學應用於人間社會，發生大效果」は、井上の次の言葉に当たる。

然れども日本の陽明派は実に活発なる事跡を成し、赫奕たる痕跡を留め、支那の陽明派に優ること遠しとなす。

(『日本陽明学派之哲学』P五七四頁。『結論』)

なお、「篇五 日本陽明学的復興及其贊助日本開国与維新大業」(日本陽明学の復興および日本の開国と維新大業を贊助する)の文末部分では、「日本陽明学」の特徴を次の五点にまとめた。

一、日本の陽明学者は、陽明学に偏して朱子学を排斥するようなことをせず、これを包容する態度をとっている。それは、道は天下の公道であり、学は天下の公学であるから、両者並び行われて悖ることはないと考えたからである。

二、日本の陽明学は、知行一体を最も重視する。だから口で言いながら、これを実行しないことを本人は深く恥とする。したがって、吉田松陰や西郷隆盛のように、身をもってわが信ずるところに殉ずるようになるのである。

三、日本人は、忠君愛国や救民討賊のような道德観念を、プラトンのイデーのような理念とするので、真善美の立場からこれを尽くすことを求める。

四、中国の宋明時代の儒者は、文文山や陸秀夫、東林志士のように、身を殺して仁を成すことを知らないわけではないが、それも国が亡んでから志を屈し生を辱しめることを欲しなかったり、君主に逆ってこれを極諫したりしたときのことで、その死は消極的である。だが吉田松陰は開国勤王につとめ、西郷隆盛は遠謀深慮を凝らし、主体的に局面を打開するために、これに身を殉じているが、その死は積極的である。

五、日本人はわが信ずるところにしたがって政策を主張するから、政権の争いはあるけれども、開港鎖国の論争の後には勤王となり、征韓論と反征韓論の争いの中で、結局国内を堅め、憲法が施行せられると、与党の保守党も野党の進歩党も、結局協調して政党政治を行うことができた。要するに、争いをしても武力を用いるところまでには至らず、国の基本を揺がすまでには至らなかった。¹⁷

上記の五カ条の「日本陽明学」評価は、おそらく『比較中日陽明学』の中で、張君勳が「日本陽明学」の影響を除いて、自分なりに考え出した最大のキーポイントである。

しかし、本書の観点から見れば、その五条は、「一」を除いて、すべて「日本陽明学」と明治期

¹⁷ 岡田武彦先生の翻訳。一九八三年(昭和五十八年)岡田武彦監修、木耳社版『復刻・陽明学』第一巻、『総論』。第一五頁。

の日本の政治情勢や社会運動とのかかわりを述べたものばかりである。肝心のその「一」も、「日本陽明学」の朱王峻別、特に「朱子学は体制派、陽明学派反体制派」といった日本陽明学の方程式の真似に過ぎないとみられる。

故に、上記の五条について、岡田武彦氏は、「恐らく主として幕末維新以後の「日本陽明学」を見てそれに敬意を払ったもの」と酷評したのである。¹⁸つまり、以上の五条は、学術の面から「日本陽明学」の特徴を述べたものというよりも、陽明学という幕末維新以後の社会運動の盛況ぶり、政治とのかかわりをうらやましく感じて発した敬意だ、ということである。

三、朱謙之の「日本陽明学」コピー

1、「井上漢学三部作」の写し

朱謙之（一八九九年—一九七二年）は、福建省の人。著名な歴史学者、哲学者、早年はアナキストとしても有名である。北京大学出身。著作は哲学、史学以外に、宗教学、文化学、音楽などの領域まで及び、「大百科全書式の学者」と言われている。

朱氏の最も有名な著作は、『日本的古学及陽明学派』（一九六二年）と『日本的朱子学』（一九五八年版）である。この二冊は、中国最初の日本思想史の専門著書として注目され、現在中国の日本思想史研究の基礎を作ったと言われている。

その二冊の著作は、まず書名から見るだけでも、井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』（一九〇〇年）、『日本古学派之哲学』（一九〇二年）、『日本朱子学派之哲学』（一九〇六年）いわゆる「井上漢学三部作」の影響が否めない。

しかも、『日本的古学及陽明学派』は、「古学派」と「陽明学派」と二つの「本論」部分に分ける。「本論一」の名前は「日本古学派之哲学」、「本論二」の名前は「日本陽明学派之哲学」となっている。「井上漢学三部作」そのものではないか、と疑われても仕方がない。

それだけではなく、構造上もそっくりである。下記は、井上の『日本陽明学派之哲学』と朱謙之の『日本的古学及陽明学派』（人民出版社二〇〇〇年再版、以下同じ）「本論二」の『日本陽明学派之哲学』部分とを比較してまとめた表である。

18 一九八三年（昭和五十八年）岡田武彦監修、木耳社版『復刻・陽明学』第一巻、『総論』。第一五頁。

《「日本陽明学」派之哲学》目录 (井上哲次郎著) 富山房一九〇〇年版	《日本の古学及陽明学派》本论二 《「日本陽明学」派之哲学》(朱謙之著) 一九六二年上海人民出版社出版
重訂「日本陽明学」派之哲学序 叙论 第一篇 中江藤樹及藤樹学派 第一章 中江藤樹 第二章 熊澤蕃山 第二篇 藤樹蕃山以后之陽明学派 第一章 北島雪山 附 細井廣澤 第二章 三重松庵 第三章 三宅石庵 第四章 三輪執斎 附 繁伯 第五章 川田雄琴 附 氏家伯寿 第六章 中根东里 第七章 林子平 第八章 佐藤一斎 第九章 梁川星巖 第三篇 大盐中斎及中斎学派 第一章 大盐中斎 第二章 宇津木静区 第三章 林良斎 第四篇 中斎以后的陽明学派 第一章 吉村秋陽 附 吉村斐文 第二章 山田方谷 附 河井繼之助 第三章 横井小楠 第四章 奥宮慥斎 第五章 佐久间象山 第六章 春日潜庵 第七章 池田草庵 第八章 柳泽芝陵 第九章 西郷隆盛 第十章 吉田松陰 附 高杉东行 第十一章 东沢瀉 第十二章 真木保臣、鍋島闲叟等 结论 附録一 陽明学派系统 附録二 陽明学派生卒年表	第一章 陽明学在日本哲学中的位置 第二章 陽明学的元祖中江藤樹 第三章 熊澤蕃山与渊冈山 第四章 繼起各派の陽明学 北島雪山与细井广泽 三重松庵和三宅石庵 三輪執斎 川田雄琴 中根东里 林子平 第五章 佐藤一斎及其门下 佐藤一斎 佐久间象山 山田方谷与春日潜庵 吉村秋陽与池田草庵 横井小楠 奥宮慥斎 第六章 大盐中斎 第七章 幕末志士の陽明学 梁川星岩 吉田松陰 (高杉晋作 久阪玄瑞) 简短的结论

上記の表から見れば、朱謙之の「日本陽明学」派の系譜も、雪嶺が原型を提示し、高瀬、井上が定着化した系譜をそのまま複製したことがわかる。しかも系譜が同じだけでなく、著書の系統、構造も同じだ、といえよう。

では、肝心の内容はどうなっているのか？特に「日本陽明学」の主張が認められたのか？

2、明治維新と陽明学について

さきほど、朱謙之の「日本陽明学」派の系譜、著書の系統ないし構造は、井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』とそっくりだと述べたが、実は唯一の違う章がある。それは、『日本的古学及陽明学派』本論二「日本陽明学派之哲学」は、ことさら「第七章 幕末志士の陽明学・梁川星巖 吉田松陰（高杉晋作 久阪玄瑞）」の一章を設けて、専ら陽明学と維新の関連を論じ、両者の結び付けを一層に強くしたことである。

朱謙之はまず、「日本陽明学」派を左派と右派にわけて、右派は「強烈な内省的徳教をもつ」、左派は「世界改造を自分の使命とする事功派」として、次のように言う。

日本陽明学派は、左派右派に拘らず、みな特に実践を重んじる。無用の学を空談しない。特に左派の大塩平八郎、西郷隆盛、吉田松陰等当時の明治維新の草莽義士たちは、浅薄を免れなくも、時代覚醒の人民性思想を現し、時代の最先端に立ち、前に邁進して、不屈不撓であった。¹⁹

全面的に「日本陽明学」の「陽明学が明治維新を主導した」説を踏襲した。そのうえ、次のような新しい説を打ち出した。

（大塩平八郎の蜂起）に継ぐ「尊王攘夷」、「倒幕」と「王政復古」（つまり「維新」のこと）がある。その時の草莽義士たちの烈々な改革運動は、実を言うと、下級武士と市民を主体とし、陽明学をそのイデオロギーとしたのである。

ここでは朱謙之はマルクス理論で明治維新の分析を試み、階級闘争理論を応用して、明治維新主体の階級を下級武士と市民とに分け、いわゆる社会存在と社会意識との関係の理論を応用して、陽明学を「明治維新のイデオロギー」とした。

3、朱謙之のマルクス主義的展開

「日本陽明学」はそれまで、「陽明学は明治維新を先導した」、「陽明学は明治維新の原動力」と曖昧な言い方が通ってきた。つまり、陽明学はただ明治維新の先導役、あるいは「原動力」に過ぎない

¹⁹ 『日本的古学及陽明学派』本論二の『日本陽明学派之哲学』第一章。人民出版社二〇〇〇年重版、第二一三—二一四頁。

かった。言い換えれば、陽明学者は直接に明治維新に参加したのではなく、あくまでも陽明学者とされる吉田松陰が、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋などの維新の元勳たちを育てた。西郷隆盛については、彼が維新の元勳ではあるが、学者ではない。学者ではないが、学者のように描かれた、という程度の話である。

しかし、朱謙之の「陽明学は明治維新のイデオロギーだ」という説は、まったく斬新な説であり、陽明学を明治維新の理論根拠まで引き上げた。そして、陽明学は維新の主体である下級武士と市民の哲学にしたことによって、維新と陽明学を直接に関連を付けた。

このような操作で、陽明学を明治維新の脇役あるいは助力の役から主体あるいは主役の座に乗せたのである。

4、朱子学と陽明学との峻別

朱謙之は『日本の古学及陽明学派』の「前言」、本論二「日本陽明学派之哲学」の第一章「陽明学在日本哲学中的位置」および「簡短的結論」で、さまざまなジャンルに分けて、日本の朱子学と陽明学との区別を述べた。それらをまとめると、次のようになる。

階級性においては、朱子学は権力を持つ封建貴族と武士貴族を代表し、陽明学は権力を持たない下層武士と市民階級を代表する。

学問の性質においては、朱子学は官側に立つ正統思想、つまり官学であり、陽明学は民間を代表する異端派、つまり私学である。

政治的立場においては、朱子学は官側の教育主義であり、陽明学は幕府から迫害を受け、謀叛の学とされた。（『日本之朱子学』より）

思想傾向においては、朱子学は朝廷擁護、守旧派で、新しい思想、たとえば蘭学を拒否するもので、陽明学は革新的、儒学界の革命派である。

哲学内容においては、朱子学は客観唯心主義であり、陽明学は主観唯心主義だが、弁証法らしきものを持つ。

特徴においては、朱子学は道統重視、朱子の学説を崇拜、個性欠乏、傑出人物少ない。現代では反動傾向出現（『日本之朱子学』本論の第一章）。陽明学は実践重視、空談しない。

上述から見れば、朱氏の朱子学・陽明学峻別は、一九五〇年代の中国の歴史を反映して、「日本陽明学」のやり方よりいっそう厳しく、対立関係をはるかに超えて、敵対関係と看做され、死活に関わる階級闘争のレベルまで引き揚げた。しかし、主なポイントでは、やはり「日本陽明学」を踏まえている。

まず、階級性、学問の性質と政治的立場は、朱謙之の説は「日本陽明学」の「朱子＝体制派」、「陽明学＝反体制派」の説を受け継いだことが明らかである。下記の井上哲次郎の話を想起すれば、な

おさら明白である。

然れども陽明撃は忽ち災厄に遇へり。朱子学を崇奉せる林羅山徳川氏に聘せられてより、朱子学は三百年間官府の教育主義となれり。是故に陽明学は初めより林家の猜疑を受け、寛政以後は益々抑厭せられたり。是を以て官府にあるもの、公然姚江の説を唱ふること能はず。甚しきは陽明学を以て謀叛の学などして之れを蛇蠍視するに至れり。然れども陽明学の謀叛の学にあらざるは弁ずるまでもなきことなり。但、朱子学が官府の教育主義なるが故に陽明学は主として民間の学者によりて主張せられ、自ら官民の別を成し、陽明学は殆んど平民主義の如くなれり。

(井上哲次郎著『「日本陽明学」派之哲学』「叙論」、第二頁)

次に、「日本陽明学」の「革命派」「革新的」思想傾向と「実践重視」の特徴は、井上下記の説を受け継いだと見られる。

陽明学は往々浅薄の誉を免れざれども、学者をして単刀直入、其正鵠を得しむるの一点に至りては、確に朱子学に優れり。・・・陽明学派は其人、比較的に僅少なりと雖も、人物は割合に多く、真に固陋迂腐といふべきもの、殆ど之れあらざるが如し。即ち中江藤樹の如き、三輪執斎の如き、中根東里の如き、春日潜庵の如き、皆行為の観るべきものあり。又熊沢蕃山の如き、大塩平八郎の如き、佐久間象山、吉田松陰、若しくは西郷隆盛の如き、皆事功の観るべきものあり。

(井上哲次郎著『「日本陽明学」派之哲学』「叙論」、第四頁)

なお、朱謙之の朱子学は「個性欠乏、傑出人物が少ない」という言い方も、²⁰井上哲次郎の『日本朱子学派之哲学』から直接引用したものである。一方、「傑出人物が少ない」とは、上記の「陽明学派は其人、比較的に僅少なりと雖も、人物は割合に多し」という説の逆説と見られる。

5、井上哲次郎との関連

朱謙之の『日本的古学及陽明学派』と『日本的朱子学』両書は、随所、井上哲次郎の言葉を引用しており、井上哲次郎論も展開している。

『日本的古学及陽明学派』「前言」では、次のように述べている。

哲学史方面では、古学派および陽明学派はなお専門著書が少なかった。井上哲次郎が提供した資

²⁰ 『日本的朱子学』（人民出版社二〇〇〇年重版）第五二六頁。

料は使えるが、立場と観点は違うので、私はただ参考のために使っているだけである。

『日本的朱子学』「前記」では、次のように述べる。

儒学の転来についての研究資料は、採り上げるべきものが多く、特に井上哲次郎と西村時彦²¹の著作は、尤も重要である。井上は、この学を研究する権威である。ただ、朱子学の起源について、述べるところが少なかったし、大阪朱子学および水戸学派については、殆ど述べなかった。しかも、倫理格言を重視し、引用する際は多く書き下し文と翻訳を使い、原始資料を引用するのには及ばないと思われる。

この「前記」の二「原始参考資料」では、井上と蟹江編集の『日本倫理彙編』十巻を堂々一位に置かれた上で、「この書には江戸時代儒学者著作三十六家、七十四種が載っている。その中の朱子学派の二巻が、最も重要である」と述べた。

朱氏の両書の中、井上の「日本陽明学」の見方を「欲しいままに」取り入れたことも注目されたい。

たとえば、『日本的朱子学』では、「朱子学＝官府の教育主義」、「陽明学＝武士（小地主）、市民の学」の説を論証するため、「朱子学が官府の教育主義なるが故に陽明学は主として民間の学者によりて主張せられ、自ら官民の別を成し、陽明学はほとんど平民主義の如くになれり。」²²と、井上の『「日本陽明学」派之哲学』「叙論」の言葉を直接に引用した。

また、江川太郎左衛門、佐久間象山、吉田松陰、西郷隆盛を幕末維新四傑とする説も、井上から受け継いでいた。
（『日本の古学及陽明学派』第三〇八頁。）

6、陽明学と明治維新の関係についての新論証

前述したように、朱謙之の『日本の古学及陽明学派』「本論二」と井上哲次郎との区別では、「第七章 幕末志士の陽明学・梁川星巖 吉田松陰（高杉晋作 久阪玄瑞）」を設けて、もっぱら陽明学と明治維新の関係を論証しようとした。以下は、朱氏の論証を検証してみよう。

吉田松陰の陽明学傾向に対する論証は、朱謙之は次のように書いている。

松陰学於佐久間象山之門，其学雖不限於姚江，但其学説一般傾向於王学左派。

（『日本の古学及陽明学派』第三七三頁）

21 おそらく西村天因（一八六五—一九二四）の『日本宋学史』を指す。

22 『日本的朱子学』（人民出版社二〇〇〇年重版）第一六三頁。

完全に井上哲次郎の下記の言葉「嘗て佐久間象山に学ぶ。その学未だ必ず姚江に限らずと雖も、亦甚だ姚江に近し」²³の中国語訳である。その次に引用される『己未文稿』の一節も、井上の引用文とまったく同じである。

高杉晋作に関しても、朱謙之の論証が完全に井上の文章をコピーした。下記は両者の対照文。

松陰門下に高杉東行てふ人あり。亦陽明の学を喜べり。東行、名は春風、字は暢夫、晋作と称す。嘗て松下村塾にあるや、伝習録の後に書して云く、

王学振興聖学新。古今雑説遂沈湮。唯能信得良知字。即是羲皇以上人。

彼嘗て長崎にあり、時に耶蘇教の書を閲し、慨然として嘆じて曰く「其言頗る王陽明に似たり。然れども国家の害寧ぞ之れに過ぎるものあらんや。其城を傾け国を覆すこと、豈に啻に大砲巨船のみなんんや。彼の見解、以て知るべきなり。

(井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』、第十章「吉田松陰」、第五六〇頁)

朱謙之は次のように書いている。

晋作名春风，字暢夫，号东行，山口藩士之子，年十九从松阴受教，常在長崎读耶蘇教书，慨然嘆曰：“其言頗似王陽明，而其害国家治安也甚矣。其傾城复国，豈但大砲巨船已哉。”早在幕末就已预见帝国主义文化侵略的危害性，可谓卓识过人。

(朱謙之『日本の古学及陽明学派』第三七九頁、本文は簡体字のまま)

「帝国主義文化侵略的危害性」云々とは、朱氏の見解であるが、以外は井上の著作を中国語に訳したものばかりである。

梁川星巖に関しては、井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』では、第二篇第九章『梁川星巖』においている。井上の論述は、まず一二首の梁川星巖の詩を取り上げて、梁川星巖の陽明学傾向を説明した。朱謙之は梁川星巖を『日本の古学及陽明学派』本論二「『日本陽明学』派之哲学」第七章「幕府志士的陽明学」に入れて、やや引用順序を変えたものの、その一二首の詩を全部引用した。

西郷隆盛に対する論証も同じである。朱氏が取り上げた南洲の陽明学傾向の証拠は、井上の言っていることとまったく同じ、伊東潜龍に陽明学を学び、佐藤一斎の『言志四録』から一〇一条を選んで「金科玉律」とした、という二点である。そもそも井上が使ったのは「金科玉条」で、同じ言葉が中国語にないので、朱氏は中国語の「金科玉律」を使った。朱氏と井上との違いは、ただその

²³ 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』、第十章「吉田松陰」、第五五五頁。

一文字だけであった。

7、「日本陽明学」素養の由来と学術規範

朱謙之は一九二九年から一九三一年までの二年間、日本に留学したことがある。日本留学の二年間は、朱氏は、日本哲学に関心がなく、西洋哲学、特にヘーゲルとマルクスに専念し、東京の書肆で書籍の蒐集にも精を出した。日本哲学史には関心がなかったと言われているが、²⁴日本語は堪能である。

『日本的朱子学』は一九五八年三聯書店から出版されたものだが、書き始めたのは一九五六年。一九五八年版『日本的朱子学』の「序言」に、自分が一九五六年から北京大学の学生に日本哲学史を教える「任務」を受けたので、原稿を書き始めた、と述べている。つまり、『日本的朱子学』と後の『日本的古学及陽明学派』は、最初は、大学の講義原稿であったが、学術の著作として出版されてしまったのだ。

四、結論

日中両国の陽明学の区別について、昔からいくつかの議論がなされてきた。

井上哲次郎は、「熊沢蕃山の如き、大塩平八郎の如き、佐久間象山、吉田松陰、若しくは西郷隆盛の如き、皆事功の観るべきものあり」²⁵という。日本陽明学に「事功」優先、つまり行動主義を重視する、という優れた点があった。しかし、考えてみれば、「事功」優先と行動主義重視は、いわゆる「行先知後」であり、王陽明の「知行合一」に反するものではないか、と言われても仕方ない。

高瀬武次郎は、「大凡そ陽明学は、二元素を含有するが如し。曰く事業的、曰く枯禪的是れなり。枯禪的元素を得ば、以て国家を亡すべく、事業的元素を得ば、以て国家を興すべし。而して彼我両国の王学者、各々其一を得て、以て実例を遺すものあり」という。要するに、日本は陽明学の「事業的」要素を継承したので、国家を興した、中国は陽明学の「枯禪的」要素を継承したので、国を滅ぼした、ということになる。²⁶拙論によれば、これは論証されていない説で、陽明学は明朝滅亡の原因ではなく、日本でも、王陽明、泰州学派および李卓吾の思想は「中国近代思惟の萌芽」と考える学者もいた。²⁷しかも、この言い方は、あくまでも政治上の成敗で陽明学を評価するもので、如何にも「日本陽明学」の社会運動性質に合致したものであろう。

24 『奋斗廿年』を参照されたい。『朱謙之文集』（福建教育出版社二〇〇二年）、第一巻、第六五—八六頁。

25 井上哲次郎著『日本陽明学派之哲学』「叙論」、第四頁。富山堂1900年。

26 『日本之陽明学』鉄華書院一九九九年版、第三三頁。

27 拙論『何謂“日本陽明学”』を参照されたい。（上海：『华东师范大学学报』、2015年第四期）。

そのほか、溝口雄三の「心本主義」と「理本主義」もあった。²⁸それによれば、「中国の思想史は「理」をめぐるその捉え方の変遷史であって、陽明学もこの「理本主義」の内にある、ところが日本では普遍的な「理」よりも主観的な心の純粋性を重んじる「心本主義」の風土があり、陽明学においてそれが特に顕著で、日本の陽明学は中国本来の陽明学とは本質的に異なる、「理」抜きの心情倫理となってしまうている、と言うのである。²⁹しかし、「心」を「理」より重視することは、「性即理」より「心即理」を重視する陽明学そのものではないか、と思われる。つまり、溝口氏が言っているのは、中国の陽明学と日本の陽明学の区別というよりも、宋学と明学、いわゆる朱子学と陽明学の区別にすぎない、と思われる。少なくとも中国の陽明学と日本の陽明学の区別ではない。

近年、上記の説が通用しなくなると、荻生茂博氏と小島毅氏が「近代性」の有無で、日中両国の陽明学の特徴を捉え、日本の陽明学は「近代的陽明学」、中国の陽明学は「前近代的陽明学」、と主張するようになった。³⁰彼らは井上哲次郎をはじめとする「日本陽明学」に批判的態度をとっていたとみられるが、その陽明学の「近代化」の判定基準自身は、やはり井上たちが百年前に確立した「日本陽明学」の判断基準そのものであった。

その判断基準によれば、中国の歴史は明代からすでに「停滞化」し、「停滞」の理由は陽明学の消極的、枯禪の要素にあり、少なくとも明王朝の滅亡は、「心学の氾濫」にも責任があった。ところで日本は明治維新を通じて、欧米基準の「近代化」を成し遂げた。少なくとも「明治維新の原動力は陽明学である」、あるいは「陽明学が明治維新を先導した」という説は、「近代アジアの共通理解となったからだ」。³¹しかも、「日本陽明学」の発動者はそれに満足せず、陽明学のいくつかの原則（「心即理」、「知行合一」、「致良知」など）をスローガンに、日本（帝国）の新しい「国民道徳」を樹立し、日本人の新しい精神世界を作り上げようとした。雑誌『陽明学』の話でいえば、「陽明学によって国民の精神を涵養し、国民の道義を高揚し、それによって国体を護持し国威を海外に発揚する」³²、ということになる。

中国明代の儒学の一流派に過ぎない陽明学は異国の日本で「近代化」ができた、というならば、中国の伝統思想が「近代化できる」、いわゆる「伝統思想近代化」あるいは「伝統思想の近代的リフォーム」といった一見普遍性を持つ課題が出てくる。

中国では、「伝統思想の近代化」の類似課題に、昔から「批判的継承」（毛沢東）、「中国哲学の本

28 溝口雄三、「ふたつの陽明学」（『理想』572、1981年）、「『日本的陽明学』をめぐる」、雑誌『現代思想』特集：日本人の心の歴史 1982年。

29 荻生茂博、『近代・アジア・陽明学』P432、東京：ペリカン社2008年。

30 荻生茂博、『近代・アジア・陽明学』、東京：ペリカン社2008年。小島毅、『近代日本の陽明学』、講談社選書メチエ369、2006年。

31 荻生茂博、『近代・アジア・陽明学』P432、東京：ペリカン社2008年。

32 一九八三年（昭和五十八年）岡田武彦監修、木耳社版『復刻・陽明学』第一巻、『総論』。

体性詮釈」(成中英)、「批評、継承、発展」の論があったようであるが、いずれも無意味な議論に過ぎなかった。

いずれにせよ、明代の陽明心学が「近代化できた」ならば、明代以外の時代の儒学思想(先秦諸子、漢唐経学、程朱理学、清代考証学など)、儒学以外の伝統学問(道家、墨家、仏教など)、あるいは明代のほかの学派(朱子学、東林派など)、ついでは古代ギリシア、ローマの哲学は、どうやって近代化を実現できるか?井上ら「日本陽明学」の先達、あるいは「日本近代の陽明学」の主張者たちに教えてほしい。

このような疑念をもって「日本陽明学」考察してきた結果、筆者は「日本陽明学」の本質、あるいは「日本近代の陽明学」の秘密を発見した。その本質と秘密とは、王陽明哲学思想のいくつかの思惟方式と行動パターンを「近代が成し遂げた」日本の社会思潮の改造(行き過ぎた欧化政策の是正—三宅雪嶺など)、国民道徳の建設(『大日本帝国憲法』と『教育勅語』のもと—井上哲次郎など)、日本人の心理構造の再構築(日本主義者が望んでいた方向—雑誌『陽明学』など)を趣旨とする「陽明学」という名の社会運動のスローガンに利用しただけである。

それで筆者がはっきりと「日本陽明学」を学問ではなく、社会運動として捉え、自分なりの「日本陽明学」論を打ち出した。

また、筆者は上記の経緯と視角を持って、孫文と梁啓超を考察してきた。それを通じて「日本陽明学」正体をはっきりとわかってきた。

小論では、張君勳と朱謙之と、「日本陽明学」が学術として中国に広く行き渡った際に重要な役割を果たした二人を考察した。二人には以下の共通点がある。

一つ目は、ともに日本留学の経験を持つことである。上節の論述からわかるように、日本滞在の経験により、二人の陽明学素養と知識は、ともに本家の陸王心学に由来するのではなく、「日本陽明学」から受容したものばかりであった。その中で特に井上哲次郎の「漢学三部作」、特に『日本陽明学派之哲学』の影響が否めない。

二つ目は、彼らは「日本陽明学」の「陽明学明治維新原動力論」に感動して受容し、そして中国に伝え、中国の近代化を促進したいことである。この点においては、梁啓超とも同じである。彼らの陽明学は学術的要素より政治性の方が強く、「日本陽明学」が明治維新を推進したように、中国でも「日本陽明学」のような社会運動を興し、苦難の中国を救い、中国の近代化を実現しようとした。言い換えれば、彼らは日本の近代化に陽明学が大きな役割を果たしたという説を信じ込んで、その陽明学を中国に伝え、中国の近代化にも役に立ちたいと考えたからである。

三つ目は、「日本陽明学」の虚構を弁別することができなかった点である。このようなパターンは、中國革命家たち、たとえば宋教仁、蒋介石、あるいは学者たち、たとえば章太炎、梁啓超などの間でも循環しているとみられる。なかには最終的に「日本陽明学」の虚構、特に「陽明学は明治維新

を先導した」のようなウソを発見し、超克した者もいた。孫文がその典型である。しかし、張君勳と朱謙之は、最後まで「日本陽明学」の虚構を見破ることができなかった。

そこに第四の共通点が見出すことができる。朱謙之と張君勳がともに中国に学術的な陽明学要素を持ちこもうとしたが、その中身は、「日本陽明学」の虚構をそのまま踏襲あるいはコピーしたものにすぎない、ということである。

二人は、戦後日本では社会運動としての「日本陽明学」がすでに下火になり、本格的な陽明学研究が興起しようとする一九五〇、六〇年代に、過去の栄光と虚構の神話を帯びる「日本陽明学」を高く評価する著作を出した。これらの著作は、一見学術著作なので、あれからの中国と台湾の学术界に絶大的な影響を与え、日本思想史研究においては創始的な意義を持つようになっていく。しかし、それらの著作は「日本陽明学」虚構の踏襲あるいはコピーの痕跡がやはり著しい。

その踏襲とコピーは、学術規範が厳しくない一九五〇、六〇年代においてはまだ許される範囲と
いうか、「井上漢学三部作」は中国ではあまり見られないという所為³³、双方を詳しく対照しなければ、露呈させることはなかなか難しかった。

³³ 「井上漢学三部作」は発行してから再版されていない。中では『日本陽明学派之哲学』は、昭和一〇年版を最後に日本でも再版されていないし、中国語に翻訳されたこともないので、中国の図書館では珍本になっている。